２０２３／１０／０８　　礼拝メッセージ　　近藤崇志　牧師

主　　題：身につけるべき新しい人②
聖書箇所：コロサイ人への手紙　３章１２－１３節

テーマ：キリストによって新しくされた者は何を身につけながら生きていくのか？

今朝も皆さんと一緒に学んでいくのは、コロサイ人への手紙３章のみことばです。先週に続いてきょうも私たちは、身につけるべき新しい人について、特に１３節を中心に考えてみます。前回の内容を思い返すためにも改めて１２－１４節までお読みしますので、それぞれよく神様のことばに耳を傾けてください。

コロサイ３：１２－１４

「:12 それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい:13 互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。:14 そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

●コーリー・テン・ブーム

皆さんはコーリー・テン・ブームというひとりの信仰者をご存じでしょうか？第二次世界大戦の初期、迫害されているユダヤ人を援助したとして、ナチスに捕らえられたコーリーは、家族とともに収容所へと入れられ、そこで大きな苦しみを味わうことになりました。彼女の父と最愛の妹ベッツイは、収容所で受けた残酷な扱いの結果、彼女の前でいのちを落とすことにもなります。しかしそのような厳しい環境を通して神様に支えられ続けたコーリーは戦後、神様の愛を熱心に証しする者として、世界中を旅することになるのです。そんな彼女がドイツで起こったある日の出会いに関して、こんなことばを自身の著書の中で記していました。「私が彼に会ったのは、１９４７年に講演していたミュンヘンの教会でした。グレーのコートを身に纏い、茶色の帽子をしっかりと握り締めた、禿げかかったがっしりとした男。しかし次の瞬間、私の目には青い制服、どくろと十字架のついた帽子が浮かんできました。一気に私の内に収容所での記憶がよみがえったのです。頭上の照明が不快な広い部屋、床の中央に置かれた哀れなドレスと靴の山、この男の前を裸で歩いた恥ずかしさ。また、妹の弱り果てた姿が目に浮かびました。そして、その彼が今私の前にいて、手を差し出して言うのです。『お嬢さん、素晴らしいメッセージでした。あなたの言うように、私たちの罪が全て海の深みにあると知るのは、どんなに素晴らしいことでしょう。』解放されて以来、収容所の人と会うのが初めてだった私は、その血が凍りつくような思いでした。『講演の中でラーフェンスブリュック強制収容所について言及していましたね。』彼は続けます。『私はそこの護衛でした。しかし、その時以来、私はクリスチャンになりました。そこで行った残酷な行為も神様が赦してくださったことを知っています。でもお嬢さん、あなたの口からもそれを聞きたいのです。赦してくださいますか。』こう彼は口にして、再び手を差し伸べるのです。その場に立ち尽くした私は、赦すことができませんでした。ベッツィーはそこで亡くなったのです。彼が手を差し伸べて立っていたのはものの数秒のことでした。しかし、私にとっては、数時間のことのように感じられるものでした。私は胸に冷たさを抱きながら、そこに立っていました。赦しは感情ではありません。それも分かっていました。赦しは意志の行為であって、心の温度と関係なく機能するものでした。私は静かに祈りました。『イエス様、助けてください。私には彼を赦すことができません。あなたの赦しをお与えください。』そして、ぎこちなく、機械的に、私は差し伸べられた彼の手を取ったのです。すると、信じられないことが起こりました。私の肩から腕をつたい、手を通して、彼へと電流が流れ込むようでした。癒しの思いやりが私の全身から流れ出たかのように、涙も溢れてきたのです。『心から

あなたを赦します。』 私は泣きました。長い間、私たちは互いの手を握り合っていました。その時ほど神様の愛と赦しを強烈に感じたことはありませんでした。」これが、かつて神様を愛していた人物コーリー・テン・ブームの示した赦しでした。彼女にとって、それが容易な選択だったわけではありません。確かに大きな葛藤を覚えていました。しかしそんな彼女も、キリストに赦された者として、大きな赦しを実践しながら歩んでいたのです。

そして、そんな「赦し」というのは、今の私たちにとっても欠かすことはできません。皆さんもよくご存じの通り、私たちの住んでいるこの世界は罪や悪が今もなおあふれかえっています。また、ほかのだれでもない私たち自身が罪人であるからこそ、互いの間で罪を犯してしまうことも多々あるのです。私たちも気づかないうちに人を傷つけ、悲しませることがあったり、自分では何の問題もないと思っているようなことばや態度で人を怒らせることがあったり、ちょっとしたすれ違いや誤解を生み出すこともあったり、まただれかの誤った言動によって憤りや憎しみ、敵意や失望などを抱いたりすることもあるのです。そしてこれは別に、親しい相手であろうと、そうでない相手であろうと関係ありません。家庭や教会にあっても、夫婦や親と子の間にあっても、教会のリーダーと会衆の間にあっても、兄弟姉妹との間にあったとしても、私たちが互いに罪を犯し関係を傷つけてしまうことはあります。罪人と罪人がともにいれば、そこには確かにいろいろな問題が起こることがあるのです。だからこそ神様を愛する者として、キリストによって新しくされた者はますます自分自身の内から古い罪の性質を脱ぎ捨てて、キリストに似た者となっていくことが大切でした。

<u>○身につけるべき新しい人：新しく着るべき“態度”と“ふるまい”</u>

１．新しく着るべきキリストに似た“態度”　１２節

そしてこれは先週一緒に見たことですが、私たちが古いものを脱ぎ捨てるだけではなくて、私たちが深い同情心や慈愛、謙遜や柔和、寛容といった新たなキリストに似た態度を身につけていくということは欠かせないことでした。私たちみな、それが大切でした。それが求められていたのです。でも同時に聖書が教えていることというのは、そういった態度だけの話ではありません。

２・新しく着るべきキリストに似た“ふるまい”　１３節

きょう学んでいくのは、そういった私たちの内側の態度から生まれる、私たちのふるまいについてです。私たち自身が私たちの内側を態度を考えることと同時に、私たちがそのような態度を持っていれば、それにふさわしいふるまいも生まれてくる、とみことばははっきりと教えていました。新しくされた者が、どんな態度、だけではなく、どのようにしてキリストに似たふるまいを目指していくべきなのか、どんなふるまいを目指して成長していくべきなのかを、私たちはこのみことばの中から見て取ることができます。ですからぜひ、自分自身のこととして考えてみましょう。私たちはみことばが教えている、キリストに似たふるまいをする者として成長しているのか、どうかです。新しくされた者が着るべきふるまいについて、きょうは二つあります。

●信仰者が身につけるべき二つのふるまい：

１）互いに忍び合うこと　１３ａ節

１３節の初めにはこのようにあります。「**互いに忍び合い**」と。まず一つ目のふるまいは「互いに忍び合うこと」でした。この「忍び合う」ということばには、もともと「耐え忍ぶ」とか「我慢する」といった意味が含まれています。皆さん聞いて気づきました？さっきも言いましたが、先週見た１２節の最後は何って言われていました？「**寛容**」と言われていました。寛容とは「**忍耐**」でした。そのような態度を持っていれば、互いに忍び合うということを実践する者として生きていこうとするわけです。ある註解者はこのことばを次のように定義していました。「（忍び合う）とは、迫害、脅し、侮辱、無関心、不平不満にも関わらず、耐え忍び、報復しないことを意味する。」と。要するに、たとえ喜ばしくない困難なことがだれかの手によってもたらされることになったとしても、すぐにやり返すのではなく、忍

耐を持ってその人に接しようとすること。それが「忍び合う」ということでした。そしてこれもまさに、イエス様のうちに見られたふるまいそのものだったのです。覚えていますか？はっきりとこのように言われていました。Ｉペテロ２：２１－２３「**:21…キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。:22 キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。:23 ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。**」少し思い返してみてください。私たちは福音書を何度も読んだことがあるでしょう。福音書を読んでいくと、その中に数多くのイエス様のことばやイエス様の教えを見て取ることができます。でも皆さん、十字架の苦しみを目の前にされた時、実際に十字架にかかって死なれた時、その時イエス様のことばはどのようなものになっていたでしょうか？この方はもうほとんど口を開くことがありませんでした。覚えています？たとえピラトやヘロデ王様からいろいろな質問を受けたとしても、もう何もお答えにはならず、祭司長や長老たちが不当な証言をしても、色々と訴えていても、それにも一言もお答えにはならず、ましてや十字架につけられて「**もし、神の子なら、自分を救ってみろ。十字架から降りて来い。**」（マタイ２７：４０）と周りの人々からさげすまれ、あざけられたとしても、何もおっしゃることはありませんでした。もちろん罪を犯したこともなければ、何の偽りも見出されないそんなお方であったからこそ、イエス様ご自身の正しさをその場で主張することができました。自分を悪く言うような愚かな敵たちに対して仕返しをして、自分の手によってすべてのものを滅ぼしてしまうことさえ、当然、容易にできたのです。しかし主はそうではなく、忍耐をもって耐え忍び、「**ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをしませんでした。**」と。その代わりに何をされました？「**正しくさばかれる方にお任せになりました。**」と。（Ｉペテロ２：２３）ただ正しくさばかれるその神様に信頼して、すべてをゆだねておられたというわけです。ペテロは言っていましたね。「**キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。**」（Ｉペテロ２：２１）と。言い換えれば、これが、私たちが模範とするべき、私たちがその足跡に沿って歩んでいく、その「耐え忍ぶ」ということの私たちへの模範だということです。このイエス様の姿こそ、私たちが見倣って成長し続けるべきものでした。

そうだとすると、私たちの互いの間で示している忍耐というものは、キリストの姿に倣ったものでしょうか？私たちも日々の生活の中にあって、訳も分からずいろんな攻撃を受けることがあるかもしれません。何の理由もなくいろんな不当な扱いを受けることもあるかもしれません。苦しめられることもあるかもしれません。自分の喜ばしくないようなことも起こるかもしれません。でも、そのようなとき私たちはすぐに口を開いて、問題をもたらした人に対して自分の手でもって報いようとしていないでしょうか？皆さん、私たちがこの互いに忍び合う者として成長しようと願うのであれば、一つの鍵があります。その一つの鍵はここにあったように、イエス様がなさっていたその姿に倣うことです。私たちもすべてを支配しておられるその神様にゆだねることです。まるで自分自身がその状況の支配者かのようにふるまうのを止める、ということです。皆さん、そんなことありません？私たちは自分の身に起こっていることを自分でいろんなふうに管理したいのです。自分でいろんなことを決めていきたいのです。そのように私たちはいろんなことを望むから、それを邪魔するものが現れれば、それに対して不平不満を覚えます。それに対して憤りを覚えることもあります。でも、それを止めることです。まるで自分自身がその状況の支配者かのようにふるまうのではなく、その状況をもうすでに支配されている方に信頼して、その神様の働きを期待することです。

覚えています？兄弟たちからひどい扱いを受けて、あろうことかエジプトに奴隷として売り払われたあのヨセフも、すべてを振り返ってこう述べていました。創世記５０：２０「**あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。**」神様はヨセフの受けた悪でさえも用いてご自身の栄光を現し、良いことをも

たらすことができるお方でした。そんな大切な真理をわかっていた彼は、兄弟に久々に会ったときに、よーし、仕返しをするチャンスだ！冷たくするチャンスだ！としていました？いえ、彼は寛容をもって接し、彼らを喜んで赦していました。私たちも日々の歩みの中で、予期していないことも、だれかとの関係において期待通りにいかないことも数多くあります。でもそんな状況に直面するなら、私たちは思い出し続けることです。その状況さえ支配しておられる主権者なる神様がおられると。その神様がなさることに私たちは期待して身をゆだねることができる、ということです。神様のみわざに期待して、私たちは互いに寛容を示す者として歩んでいこうとするのです。「互いに忍び合うこと」それが新しくされた者が身につけるべきふるまいでした。

２）互いに赦し合うこと　１３ｂ節

次に二つ目のふるまいとして挙げられていたのが、「互いに赦し合うこと」でした。さきの続きを見てください。１３節にこうありました。「**だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。**」パウロはここではっきりと、私たちひとりひとりが、互いに赦し合うようにと教えていました。兄弟姉妹が忍び合うだけではなく、互いの間で赦しを実践する者として歩んでいくということを求めていたのです。改めて少し考えてみてください。確かに私たちはこの教え自体、もう何度も耳にしてきたことでしょう。すでに赦すことの大切さを学んで、これまでにだれかに対して赦しを求めることが何度もあったかもしれません。でも皆さん、問われるのは、果たして今、私たち自身が互いの間で赦しを与える者として歩んでいるのか、どうかということです。 かつてＣＳルイスがこんなことを述べていました。「誰もが赦しは素晴らしい考えだと思っています。自分が赦すべきことがあるまでは。」と。そう思いません?!赦しは、すばらしい考えです。でも、自分自身が赦さないといけないことが起こったときに、私たちはそれを難しいと。私たちは赦しを受けることを周りに期待して求めることがあります。でも自分自身がそれを与えることを躊躇し、拒むことがあるのです。またみことばの教えている赦しではなくて、自分が与えることのできる赦しを必死に考え、そしてそれを与えることで満足し、よしとしていることがあるかもしれません。言えることは、私たちはこの互いの間で赦しを実践することに関して、難しさや弱さを覚えてしまうことがあるということです。だからこそ皆さん、いま一度よく考えてみましょう。みことばは私たちに対してどんな赦しを具体的に求めているのでしょう。互いに赦し合う者として、私たちが歩んでいくというのは、いったい何を意味しているのでしょう。残念ながら、赦しに関する教えのすべてを限られたこの時間内で見て取ることはできませんが、パウロは少なくともここに赦しの本質とその模範を教えてくれていました。赦しの本質とその模範、この二つに焦点を絞ってそれぞれよく自分のこととして考えてみましょう。

ａ）赦しの本質：恵み

“カリゾマイ”（語源：カリス「恵み」）

最初に赦しの本質についてですが。赦しの本質、それは「恵み」でした。ここでパウロが用いていた「赦す」ということばは非常に興味深いもので、“カリゾマイ”というギリシャ語が使われています。ここで使われている「赦す」という“カリゾマイ”の語源となっているのは、“カリス”という「恵み」を表すことばでした。つまりこの「赦す」ということばは、もともと「恵みを示すこと」「本来値しない愛や赦しを与えること」を表していたのです。またそのように「恵みを示すこと」という意味が根底にあるからこそ、このことばには「借金や負債を免除する」とか「帳消しにする」といった意味も含まれていました。本来なら自分に対して返済の義務を負っている人の借金をみずから取り除いてあげることを、このことばは言うわけです。これと同じことばをイエス様はペテロとの会話の中でこのように用いておられました。ルカ７：４１－４３にこのように書いています。「**:41 「ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとりは五百デナリ、ほかのひとりは五十デナリ借りていた。:42 彼らは返すことが**

できなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか。」:43 シモンが、「よけいに赦してもらったほうだと思います」と答えると、イエスは、「あなたの判断は当たっています」と言われた。」と。ここで二度にわたって登場していた「赦す」ということば、これはどちらも同じ“カリゾマイ”になります。どうです？このことばが持っている意味や姿が、ここでよく見て取れません？赦すというのは、負債を負っているような者に、本来なら厳しい仕打ちや罰などが当然値するような者に、みずからあわれみを示して、その者が持っている負債や仕打ちや罰を帳消しにしてあげるということでした。本来であればそれに決して値しない者に、値しないものを喜んで与えること、そんな恵みこそが、赦しの本質だったわけです。

パウロは、そんな赦しでもって信仰者が互いに赦し合うことをここで求めていました。そしてこれは、その前に連なっていることばからも読み取ることができます。１３節に戻って、「**互いに赦し合いなさい。**」の前を見るとこのように書いてありますね。「**だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても**」と。ここで使われている「**不満**」ということばも非常に珍しいもので、実を言うと新約聖書の中でこの箇所にしか出てきません。そしてこのことばには「避難」や「過ち」、そしてもう一つ「不平や不満の原因となるもの」といった意味が含まれています。「**不満**」ということばの中には「不平や不満の原因となるもの」といった意味が含まれています。

皆さん、よく一緒に考えてみましょう。ここでは「たとえだれかが不平や不満を生み出すその原因となるような罪や過ちを犯したとしても、たとえだれかの誤った言動によって自分が傷つけられることがあったとしても、その原因を生み出したのが相手であったとしても、それによって自分が混乱したりいろんなことを思うのが当然だったとしても、あなたがたは、赦し合いなさい。」ということが言われていたわけです。パウロはここである可能性を否定していませんでした。何かと言えば、兄弟姉妹の中において残念ながら、時に互いが互いを傷つけてしまうことが現実の問題としてあるということを、彼は述べていたのです。悲しいことに、私たちは互いの間で、だれかがだれかへの不満を生み出してしまうような、だれかのしたことが実際にほかの人の内に悲しみや痛みをもたらす原因となってしまうようなことがあるということを否定していませんでした。そしてそれは、私たちもよく知っています。そしてそんなひどい扱いを受けるのなら、それを受けた者はある意味その相手に仕返しをすることだってできるのです。あの人が先に私を傷つけました、私が受けた同じ痛みを味わわせることが正当でしょ?!当然の応答でしょ?!…と。そのように自分の権利を主張することもできたりするでしょう。でもその中で、みことばは求めていたのです。本来なら厳しい罰が値して当たり前のような者に対してであったとしても、その罰を免除してあげなさいと。相手があなたの優しさや忍耐というものにいっさい値することがないような人物であったとしても、みずから進んで赦しを与えてあげなさいと。それが、神様が求めておられた「赦し」「恵みを与える」「恵みを示す」ということでした。

さて、ここまで聞いてきて、果たして私たちの持っている赦しは、私たちの考えている赦しは、私たちが実践している赦しは、みことばの教えている特徴を持ったものでしょうか？決して値しないような者に、値しないものをみずから進んで与える、その恵みに富んだものでしょうか？ちょっと思い返してみましょう。皆さん、最近だれかのしたことがあなたの内に不満や不平や痛みを生み出したときのことを思い浮かべてみてください。それは家族かもしれませんし、兄弟姉妹のだれかかもしれません。だれかが原因で自分自身が悲しみを覚えたり、苦しみを覚えたり、痛みを覚えたり、そういったことがあったその時を思い出したときに、果たしてその時、私たちはいったい何を考えて、どんな応答をしていたでしょう？あの人が私を傷つけました。では私も同じようにして傷つけましょう。…そうやって怒りや憤りに思いが支配されていたのではないでしょうか？実際にやり返すことはないかもしれません、見える範囲では。でも私たちは、じゃあそんな人から距離をとって冷たさを味わわせて、それによって同じ苦しみを味合わせてやろうと、そういうふうに仕返しすることを考えていたのではないでしょうか？そ

れとも、やり返すのではなくみずから進んで深い同情心を、慈愛を、謙遜を、柔和を、寛容を示そうとしていたでしょうか？私たちひとりひとりに問われるのは、互いの間で恵みを示し合うことを熱心に求め続けているでしょうか？…でした。

そしてまちがいなく言えるのは、私たちがこの赦しの本質である「恵み」を別の何かと取り替えてしまうなら、それはもう聖書の教える「赦し」ではなくなってしまっているということです。どういうことか？こんなことは私たちのうちによく起こります。例えば私たちはだれかに傷つけられれば、時にこのように考えるかもしれません。あの人によって自分が大きく傷つけられました。だから私の気持ちは、絶対に赦したくはありません。この想いや感情がいつか落ち着くその時までは、愛も優しさも何もかもその人に示したくはありません…。 こうして私たちは「恵み」というものを、自分の感情と取り替えてしまうことがあるのです。でももし感情に支配され、みずからの意志で進んで赦そうとしていないのであれば、それは聖書の描いている「赦し」とは違うということです。またある時はこう考えるかもしれません。あの人のしたことは酷すぎます。だから赦しを与えてあげる前に、まず私が考えるいくつかの条件をその人に課しましょう。それらすべてを完全に満たすことができたらその時私は満足して、私の赦しを与えてあげましょう…と。でもこうして私たちが、恵みを自分勝手な条件と取り替えてしまうというのも、まちがっていました。もし相手が私の赦しに値すると証明されるまでは赦さない、といった態度をとっているなら、それも聖書が描いている赦しではないというわけです。もちろん、罪を犯した人物にもその罪を悔い改めて和解を求める責任があるということを、聖書ははっきりと教えています。でも、もし私たち自身が頑なに恵みを示すことを拒み続けているのなら、その心は次第に不満や苦い思いにあふれるようになって、喜びや平安を失ってしまうでしょう。またそれに加えて兄弟姉妹との関係さえ壊れてしまうこともあるでしょう。だからこそ、私たちは赦し合うことが必要でした。値しないものを与えるということ、そんな恵みが互いの間には欠かせなかったのです。

こうして私たちが神様の赦しの基準を覚えるときに同時に、正直こんな赦しを実践するなんて自分にはできそうもないと思いませんか？もしそう思うのなら、私たちは次に見ることをいつも心に留めておかなければいけません。パウロは赦しの本質について触れた後で、今度は赦しの模範についてここで教えてくれていました。赦しの模範です。

ｂ）赦しの模範：主の赦し

もう一度１３節をよく見てください。彼はこう言うのです。「**互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。**」「**主があなたがたを赦してくださったように**」「主の赦し」これが私たちの模範でした。そして皆さんよく聞いてください。この模範こそ、私たちにとっての最高の喜びでもあり、最高の希望でもありました。どうしてだと思います？それは、私たちが互いを赦し合うことができるのは、何よりもまず主が私たちを赦してくださったからでした。主が私たちを赦してくださっていないのなら、私たちは「**主があなたがたを赦してくださったように**」などということはできないのです。でも、主の赦しを私たちが知ったから、主の赦しをあなたが受けたなら、私たちはその同じ赦しを互いの間で示そうとするのです。主に赦された者として、主に赦されたかたちで、互いに赦し合いながら歩んでいくということ、それがすべての信仰者に求められていることでした。そしてこれと同じことは別の箇所でも明白に教えられていました。エペソ４：３２にこう書いています。「**お互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。**」神がキリストにおいて私たちを赦してくださったから、そのように赦し合おうと。主が私たちを赦してくださったから、その赦しを受けたから、だから私たちも互いの間で赦し合おうと。そのようにして歩んでいくためには、私たちが赦し合う者として成長していくその歩みには、当然、私たちがいつも主の赦しがどのようなものだったのかを覚え続けている必要があるのです。

だから改めて考えてみてください。神様がキリストにおいて成し遂げてくださった「赦し」というのは、いったいどのようなものだったでしょう？どのようなものを私たちは受けたのでしょう？その赦しは確かに一方的で完全な、値しない者に対して与えられた、ただ恵みによる犠牲的な赦しでした。思い返してみてください。みことばははっきりと、私たちはみな生まれながらに罪人であると繰り返し教え続けていました。ローマ３：２３にも書いていました。「**すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず、**」と。すべての人でした。例外はひとりとしていませんでした。すべての人が神様を愛そうともせず、ただこの方に背を向けて逆らい続けて生きてきたのです。数え切れないほどの罪を犯し続けてきた私たちは、大きな負債を神様に対して負っていました。その負債はあまりにも巨大すぎて、だれも言い逃れをすることも、だれひとり言い訳をすることも、だれひとりとして返すこともできないほどの膨大な借金でした。そして私たちはその膨大な借金を、その負債を前にして何もすることができず、私たちにはただ神様からの正しいさばきだけがあったのです。私たちは罰せられて当然の者でした。罪を必ずさばかれるその聖なる神様の前に、私たちはただ正しくさばかれることにのみ値する存在だったのです。

しかしそんな希望などなかった私たちに対して、神様が愛を示してくださいました。自分にはどうすることもできなかったその罪の代価を、私たちには何もすることができなかったその負債のすべてを、だれでもない神様がキリストの十字架において支払ってくださったのです。エペソ２：４－５にこう書いています。「**:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。**――」被造物である私たちが、土地のちりから造られたそんな私たちが、創造主である神様に逆らうというあまりにも愚かで罪深いことをしていたそんな私たちに対して、神様が恵みを示してくださいました。また何よりも私たちを赦すために、神の御子であるイエス・キリストは、十字架の上でご自身のいのちを犠牲として払ってくださったのです。以前見た同じコロサイの中でもはっきりと言われていましたね。戻ってコロサイ２：１３－１４にこう書いていました。「**:13 あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。それは、私たちのすべての罪を赦し、:14 いろいろな定めのために私たちに不利な、いや、私たちを責め立てている債務証書を無効にされたからです。神はこの証書を取りのけ、十字架に釘づけにされました。**」と。凄いことが書かれていました。「**私たちのすべての罪を赦し**」と。キリストを信じた者の罪は、恵みによって確かにすべてが赦されたのだと言われていました。犯した罪の一部が赦されたのではありません。大部分が赦されて一部分はまだそのまま残っているのでもありません。私たちがその残っている一部分を自分の正しい行いによってどうにかしてその救いを、どうにかしてその赦しを手にしようと頑張って手にするものでもありません。もうすべて赦されたと。生まれながらに神様に逆らい続けてきたそんな私たちのすべての罪、過ちはキリストにあってもう赦されたのです。私たちがした罪深いふるまいだけではありません。私たちが発していた悪意に満ちたそのことばだけではありません。私たちが心の内で抱き続けていたすべての神様の前にまちがった思いも考えも感情もそれらすべてさえ、もうすでに赦されたのです。これまでの罪も、今の罪も、そしてこれから先の罪も、キリストにあって赦されました。だからこそ、キリストにある者が今罪に定められることはないのだと、決してないのだとそう約束されているのです。それが、神様が私たちに示してくださった「赦し」でした。

改めて自分のこととして考えてみてください。いったいどれだけ値しないその大きな赦しを、私たちはただ恵みによって受けたのでしょう。忘れてはいけません。キリストにある赦しには決められた回数があるのではありませんでした。あなたはもうこれだけの回数罪を犯しました。限度を超えています。だからもう赦されません。…そんなものではありませんでした。そんなものだったとしたら、私たちはどうなります？考えたくもありません。主は私たちのすべての罪を赦してくださったのです。キリスト

にある赦しは決められた数だけではなく、不完全なものでもありませんでした。この罪はまだ赦してあげるけど、この罪はあまりにも深刻で酷いものだから今は赦しません。もうちょっと経ってから赦します…そんな限定的なものでもありませんでした。主は私たちのすべての罪を完全に赦してくださったのです。

またキリストにある赦しというのは、私たちが何かを成し遂げたからとか、それに私たちが値したから与えられたものでもありませんでした。これだけのすばらしい行いをあなたが積み上げたから、だから認めてあげましょう。だから赦してあげましょう。…ではありませんでした。罪深い私たちには、完全な神様の基準を満たすことなど到底できません。だからこそ、本来そんな私たちに値したのは、たださばきでしかなかったのです。しかしそんな私たちに主は恵みを示してくださって、すべての罪を赦してくださったのです。 かつて詩篇の著者も、神様の赦しについてこう述べていました。詩篇１０３：１１－１２「:11 **天が地上はるかに高いように、御恵みは、主を恐れる者の上に大きい。**:12 **東が西から遠く離れているように、私たちのそむきの罪を私たちから遠く離される。**」あわれみ深い神様は、破綻していたそんな私たちをあわれんでくださいました。罪を全く取り除き、「**東が西から遠く離れているように**」って、皆さん、東から西ってどれだけ離れていると思います？そんなの私たちにはわからないぐらい離れているのです。それだけ私たちを罪から引き離してくださったというわけです。こうして神様は測り知ることのできない赦しを、それに全く値しない者に対して与えてくださいました。そうだとすると、そんな赦しを私たちが感謝なことに、喜ばしいことにもうすでに受けたのなら、私たちは主から受けたそのかたちで、同じように互いに赦し合う者として歩んでいくということが求められていたのです。

果たして私たちの赦しは、主の赦しに倣ったものでしょうか？値しない者に対して与える、一方的で完全な犠牲的な赦しでしょうか？それとも、いつも相手のした過ちを数え続けていて、赦しに自分勝手な回数を設けていたりしないでしょうか？ここまでは赦すことができると、恵みの限度を自分が定めてはいないでしょうか？この罪も赦してあげるけど、でもこの罪は深刻すぎるから赦さないと、恵みを限定的なものにしてはいないでしょうか？まちがいなく言えるのは、もし私たちが、自分がどれほど大きな恵みによって赦された罪人なのかということを知らなければ、もしくはそれを忘れているのであれば、このような赦しを互いの間で実践するということは到底できないということです。私たちは、このような赦しを生まれながらに持って生まれたわけではありません。もし私たちが自分を傷つけた相手に心が奪われていて、この人は何て酷いことを私にしたのだろう、私はいっさいまちがっていません、相手がまちがっています、この人のしたことは決して赦されません、限度を超えているんです…と、私たちがずっと考え続けているのなら、みずから進んで犠牲を払うなどというそのような赦しを示そうとすることなど、望みもしないでしょう。でも私たち自身が、罪と一線を画しておられる聖なる神様の前にどんなに多くの罪をこれまでに犯し、その方の御名を傷つけ続けてきたのかということを覚えるなら、全く何の価値もない愚かな罪人である自分に対して、決して値しない救いを主が与えてくださったことを感謝するのなら、私たちはその喜びのゆえに同じ赦しを互いに示していきたいと、歩んでいこうとするのです。だからこそ私たちは忘れないことです。確かにこれから私たちが日々歩んでいけば、罪人と罪人がそこに居続ければ（死ぬまでですけど）、必ず私たちは互いに罪を犯して傷つけ合ってしまうことがあります。でもそんなときは覚え続けることです。忘れないことです。私たちが神様に対して罪を犯したのと同じぐらい私たちに対して罪を犯した人は、これまでもこれから先もだれもいないということです。私たちはもうすでに最大の赦しをキリストにあって受けました。その主の赦しを受けた者として、互いに赦し合う者として歩んでいくことです。それが新しくされた者にふさわしいふるまいでした。

きょう学んだ、「互いに忍び合い合うこと」と「互いに赦し合うこと」はどちらも、キリストによって救われ、新しくされた者にふさわしい身につけていくべきふるまいでした。でももし、まだこの中に

その神様がキリストにあって与えてくださった赦しを知らないという方がおられるなら、まだイエス・キリストを自分の救い主として、主として信じ受け入れていないという方がおられるのであれば、どうかよく知っておいてください。そんなあなたは、今なお聖なる神様から離れて、神様の敵として歩んでいるということです。そしてそんなあなたはまさに今、永遠の滅びへと一日一日近づいています。でもまだ救いがあります。だからどうかきょうと呼ばれるこの日、私やあなたのような愚かな罪人のためにご自身のいのちをささげてくださった、あわれみ深い救い主のあわれみを求めてください。自分の罪深さを素直に認めて、イエス・キリストを自分の救い主として信じ受け入れてください。大きな負債を負っている者を救うことのできるそんな力は、私たち自身の内にはいっさいありません。ただその代価を支払ってくださったお方、唯一その救いを与えることのできるイエス・キリストのうちにのみあります。だからこそ、この方を求めてください。

また最後に、もうすでにこの主の赦しを受けられたと言われる皆さん、このすばらしい感謝の恵みの赦しをもう自分のこととして知ったと言われる皆さん、私たちは主にすでに赦された者として、主に赦されたかたちで互いに赦し合いながら歩んでいくということ、それをみことばから求められていました。コーリー・テン・ブームも同じでした。彼女の状況を考えてみれば、赦しを与えることは本当に困難だったでしょう。しかし彼女はキリストの赦しを受けた者として、主の助けを祈り求めながら赦しを示そうとし続けていました。私たちも同じ測り知ることのできない赦しを受けました。受けたのだとすれば、値しないすばらしい恵みを味わった者として、ともに互いに忍び合い、そして赦し合う者として成長し続けていきましょう。